

高級官僚の汚職・不祥事が次々と明るみに出てくる。政治家も相変わらず不甲斐ない。オレシイ共済事件には果て果て。また和歌山県立医大病院でのミルク注入事件隠し問題など、子を持つ親にとって怒り心頭にも発する事件である。

三月三日の桃の節供がやって来る。女兒を持つ筆者の家でも「月最後の日曜日に、三人分の雛入形飾り終ると、二間が完全に塞がってしまった。かうした現在のやうな段飾りの雛入形の形が整ったのは、江戸時代に入ってからといはれ、しかも女雛・男雛が対になった程度の質素なものであった。その前は、赤児の枕元に置いて魔除としたり、撫子として使用した人形、天児(あまがこ)があつたとされる。さらに元を

追れば、三月三日の節供の行事として水辺に出て禊をし、桃の花を浮かべた桃花酒を飲み、災厄を払ふ習俗が古代中国からわが国にもたらされたことには違いない。わが国では巨匠の職として、形代が身体を撫で、それを水に流し、穢れを祓ふ行事が貴族社会を中心に営まれ、人形(ひと)が心から雛形に発展し、室町時代から雛

祭が祝はれるやうになったといふ。数日前に見た「雛百種」(上・中・下巻)といふ大正四年に版木の色刷で摺られた、雛人形の姿が写し出された古本からの知識である。桃の弓・桃の矢、桃の枝のつぼで、桃花の御饗、桃花祭など魔除の靈木である桃の枝・花を使った神事、芸能は枚挙にいとまがない。余談になるが「三國志」の劉備・関羽・張飛の三名が結んだ義兄弟の契を「桃園の誓ひ」といふのも、三名の清廉潔白であることの象徴が桃に託されてきたことは、今更指摘するまでもない。また人形を水に流し、穢れを祓ふことも、心身共に清潔でありたいと願ふ日本人の伝統的な美徳であらう。今でも、流

し雛をおこなつてゐる地方もあるし、大量のお雛様を舟に乗せて海へ流す淡島神社の雛流しなどもある。また、村境の岩の陰に雛人形やビニール人形が捨てられてゐるのを、二十年程前驚きをもって見つけたことを思ふ所だ。山深い村に古の村を見たからであつた。三信連地域の村は、折口信夫が「人も、馬も、道ゆきつかれ死にけり。旅疲かさなるほどの、かそけさ。」(詩集

「海やまのあいだ」と詠んだ村であつたことを深く知つた。山深い三信連地域の村むらに温泉が湧いてゐる。花祭りでは知られる奥三河の豊根村では免鹿鳴温泉「バルとよね」。折口が何度も足を運んだ、雪祭りのある阿南町新野には阿南温泉「かじの湯。お潔め祭りの天龍村」向方には天龍温泉「お潔め湯」ができた。また、隣の大井村にはうらぎ温泉「こまどりの湯」。その隣村平谷村「ひまわり

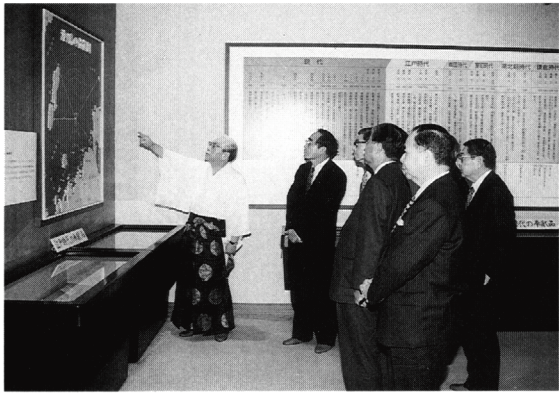
雛祭りと温泉

りの湯。阿南町の隣下桑村「秋桜の湯。西浦田集のある水窪町山王峡温泉「白樺の湯」など。この地域は軒並大規模な温泉センターを、ここ三年ばかりの間にたち上げたのである。共通してゐるのは①最近開発した温泉であること②過疎の山村・町の経営であること③規模の大きな④ジェッツ・トバス・打たせ湯・広い複数の湯船・野趣に富んだ露店風呂があること⑤近代的な設備・レストラン・大きな休憩室があること⑥入浴料が安いこと(三百円~五百円)などが挙げられる。お祭りのとほり、きつかけは竹下内閣当時の「ふるさと創生資金」である。

第十七回「福北懇談会」開催

宗像大社勅使館

九州経済界の中核、七社の社長各位出席



九州地区経済界の中核を成す、福岡・北九州両市に本社を置く九州電力(株)、西日本鉄道(株)、福岡銀行、九州旅客鉄道(株)、東陶機器(株)、(株)安川電機、(株)井筒屋の七社の社長で構成される「福北懇談会」の、第十七回目の会合が三月十四日午後一時より、当天社勅使館を主会場に開催された。

この福北懇談会は、去る昭和六十二年に「福岡、北九州の両都市を連携して、北部九州の一体的発展を図るため、両市に本社を置く財界人同士の意見交換を目的」に結成された。

同日、一月に第一回の会合を行い、以降交代で幹事会社社務局となつて主要議題と日時、会場を決めテーマ毎に外部から講師を招聘して七社の社長各位出席のもと開催されてきた。

第十七回のテーマを「福北地域と東アジアの国際連携」と決定、幹事会社の九州旅客鉄道(株)取締役社長石井孝孝氏の強い意向で、古

代から玄界灘の海を守護、北部九州の陸上守護の守護神として崇拝されてきた、宗像三女神を祀る宗像大社に於て開催したい、との事務局の要請に依り、当天社にて実施された。

当日は午後、五時十分迄に七社の社長各位参集、儀式殿にて小休憩の後、定刻二時本館前に於て井筒屋参拜の玉串拝礼を各社社長が

十世紀(古墳・平安時代)を中心とする「神・鳥祭祀を中心とする」「神・鳥祭祀を中心とする」「神・鳥祭祀を中心とする」

国民の崇敬厚く、朝鮮、中国はもとより中近東諸国からの、当時最も貴重な品々の献上品を目の前にして、重要文化財指定の展示品を見学、説明を養父宮司、担当職員から受け、七社の社長を始め随行の方々も、古部九州が、日本の文化、交易で海外交流に重要な役割

を果してきた歴史的事実に更らに深く認識された。神玉館展示、勅使館に於て四時十五分、市村真一氏(大阪国際大学副学長・国際アジア研究センター所長)北九州市長、東アジア経済と将来展望と題する講演が一時間に渉って行なわれ、引き続き七社の社長のみ懇談会を三十分間行い、清明殿に於ては各新聞社への記者意見を

行ない、第十七回福北懇談会の総べてのスケジュールを運籌なく定刻の午後六時に終了。

引き続き七社の社長と講師を交え懇談会が催され、席上でも大社のごとくに関して様々な質問が養父宮司に寄せられ、二時間余の有為な会食を行い午後八時過ぎ散会となった。

今回の会合に参加された各位から「宗像大社は交通安全の神様であること、知っているのが、神社の社格、御祭神の神威、神徳の崇厚、

国家、国民により古代から連綿と崇拝、護持され、海外交流の守護神として果しては各新聞社の歴史的事実の重きをもつ神社であることが十分に理解し認識することが出来、大変有意義な会合であつた」との好評を得、会場にはほろほろと涙を流して感謝すべき会談であつた。

〈第十七回福北懇談会出席者芳名(順不同略称)〉

- 九州電力(株)取締役社長 大野 茂
- 福岡銀行(株)取締役頭取 佃 亮二
- 西日本鉄道(株)取締役社長 橋本 尚行
- 東陶機器(株)取締役社長 江副 茂
- (株)安川電機取締役社長 橋本 伸一
- (株)井筒屋取締役社長 木原 文吾
- 九州旅客鉄道(株)取締役社長 石井 幸孝

以上

新強ウケル地区には所々に俗称で「鳥塚(うそん)の墓」と呼ばれている古墳がそこそこ群集している。草原に黄土を固め、低く盛り土して墳丘とした「土塚墓(どづか)」である。中には円盤で表面を覆っているものもある。これらが大小数基つづ南北に並ぶかうで構築されている。内部はほとんどが木を積み上げた堅穴式の墳墓である。

「鳥塚」とは、中国漢代(二二〇〇年前)から隋が新たに中国統一するまでの南北朝時代(四〇〇年前)に於て、天山山脈の北方の新強ウケル自置郡に居住していたトルコ系遊牧民といわれている。前漢の武帝の頃より漢とは友好関係にあったが、五世紀(五二七)に於ては、高台台の遊牧民が所有している青銅製と鉄製の剣・戈などの武器の地方に原点をなく、彩陶器がやはり主であった。

この地方の前期の時代には、やはり漢との交流が頻繁に行はれたためか、古墳からの出土品として小振りではあるが、内行花鏡、獣骨鏡、無文鏡等といわゆる漢式鏡と言われる青銅製の鏡を、古代中国の外つ国で見ることが出来た。

また新たに目についたのが、晋代(三四世紀)の頃の古墳の副葬品に形代類や馬の飾り金具などが多量に出土してゐることである。

中国本土でもそうであるが、全時代を通して、豪華な装飾品の他に生活用品と共に子供のおもちゃみたい

に作られたミニチュア類が多く出土している。壁面の中にも当時の生活模様が多く描かれている。

形代類も人形・馬形だけでなく、小形の鳥や動物類も多くあり、いわゆるミニチュアとして副葬している。特に、人形は沖ノ鳥祭祀の様に簡素化されていく

てはあるが飾り人形(にんぎょ)である。頭には髪を、顔は目・口・鼻・耳・髭をときき、体には手・足を附けた他、ちゃんと服を着けたかうなことを描いている。

人形といつても沖ノ鳥とは意を異にした副葬品で、やはり生活様式の一つを表現しているといえる。この展示品の中でも特に目についたのは、高台台のフイングラスである。瑠璃碗は今調査のもう一つの目的であり、次号に報告はのこしておく。

一話 (59) 中国調査紀行 (22) 楽 奈 子

八月十五日(月) 朝六時半に眠がさめ散歩に出る。まだ空は薄暗く涼しい夜気を感じる。八時頃ようやく日が高くなり今日も快晴。また暑くなりそう。

このウルクと北京とは時差は三時間、日本大陸はやはり広い。十時に宿を出る。朝食をゆつくりと摂り遅い出発である。今日はまず「新強ウケル」自置郡博物館から

新強ウケル地区には所々に俗称で「鳥塚(うそん)の墓」と呼ばれている古墳がそこそこ群集している。草原に黄土を固め、低く盛り土して墳丘とした「土塚墓(どづか)」である。中には円盤で表面を覆っているものもある。これらが大小数基つづ南北に並ぶかうで構築されている。内部はほとんどが木を積み上げた堅穴式の墳墓である。

宗像大社歌会
俳句作品集 四〇七

福間 森 清
群れ雀根根に春先乱れとぶ

自由ヶ丘 細川 綱子
船りの春のマスクの大きかり

日ノ里 花田いつ枝
脇道ありし宮坂いぬふぐり

藤沢 井上 玄洋
梅林のしとねに座る雪の富士

東郷 吉武 湧東
受験子の小さき胸に抱く闘志

東郷 中野 きみ
百年の樹冷に絶えて梅さかり

東郷 吉田 杢子
大宏の白妙の梅父来寿

東郷 吉田 杢子
冬さらら出土の腕輪陽に透けて

東郷 三浦美千代
蘭屏禁いてひとり浅き春

東郷 有吉重紀子
杖つきて片手に暮れの荷の重き

東郷 田中 雨業
野佛の龜殻深まる野大走り

東郷 木原 房子
強霜と黒潮ととき葛の原

福岡中央 山下しづえ
三四の番つけたたり二年梅

若松 高橋 忠實
暖冬に菜の花を見る寒節季



(続) 浪の寄物

114

いししいただし

吹上浜は以前と同じように、波消アブロックの投入や護岸はほとんどされなかったのはうれしかった。伊作川の河口は護岸工事が行われていた、万之瀬川にも新しい橋が架けられているが自然を損うものではない。吹上浜には吹上浜運



吹上浜 流木類の漂着

動公園や吹上浜海浜公園等に、整備や工事も行われていた、砂浜上に遊歩道もあるが、海からの距離が保たれ、海産物にも配慮されているように感じられた。吹上町にある吹上砂丘荘から吹上河口に行くまでには伊作川河口近くの駐車場まで約七分ほど、それから三分ほど歩いてやっと浜へ出る。砂丘は延々と続き、天気とせまいあつて先はぼうとして見えな。砂は灰色で大小の軽石に漂着物は流木類が多い。

プラスチック・ビニール類は中国や韓国製品で、特に中国製品が多く感ぜられた。最近玄界岬でも中国製品が韓国製品を圧倒する時もある。漁の浮子プラスチック製品は黄色・青色をしているが、色が鮮やかな点もあつた。いたるところで目についた。昨午未から今年にかけて玄界岬で漂着の多かつたコヤシは定形3個・2個体分果皮が選別していた。他にニッパヤシ・ゴバンノアシ・モダマも拾つたが、一度に数種の南方果実・種子漂着が玄界岬で最近は少なくなり、久しぶりに胸がときいた。灰色のぼい砂質で軽石混じりの浜である。流木類の姿がなかなかいい。玄界ではあまり見られないように



胸は、肋骨・下頸骨等を取り出した。完全なものはなかったが状態を知ることができ。この骨のイルカ長いカからハセイルカではないかと思う。頭骨・下頸骨の部分に一部脂肪と腐敗した肉が付着していたので、冷たかつたが海に入り洗つたので、それをビニール袋に入れて砂丘の間に隠し先を進む。薬瓶の「醫局院」はガラス製で陽刻された字が面白い。中国製ライター・ウケに重しにつけられた高さ一〇センチ、横二センチの土製錘等珍しく拾つてきた。車がないと多くの漂着物は拾つてくることはできないが、今回は添田氏の車で運んで行くことができたのである。それにしては砂丘から車まで運ぶのは大変で、手が抜けそだった。

宗像むかしばなし

玄海の一ツ火(中)

博多は主として朝鮮半島との交通の拠点に当り、その名が古書に現れたのは千百年前さかのぼる。神功皇后の出陣以後は対外的軍政となり、太宰府が置かれてから大陸折衝の特殊な役割を担い、降つて元寇以後は大陸に對抗しようとする風潮の高まりと共に、博多は政治的・軍事的にまた通商のにも、益々重きを加えてきた。大陸が隋唐の時代に受けて、その圧力が朝鮮半島に於けるが權益

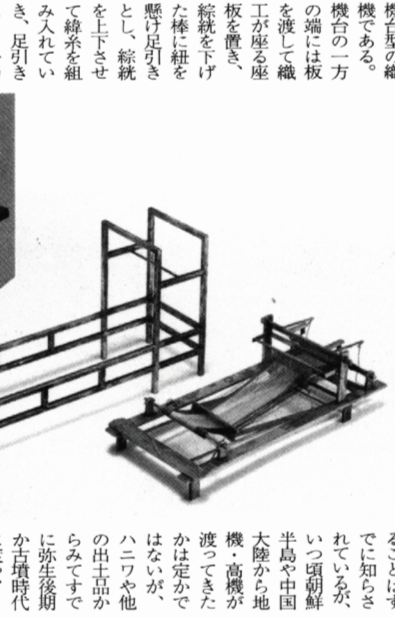
にも及んで任那府を失い、太宰府は有名無実の海外官庁となつた。従つて海外との交通貿易の振つた後が続き、大いに進んだ。殊に室町時代の末葉に至つてからは、中央の威令行はず、少式・大内・毛利等地方豪族の活動が盛んとなつて世はまさに戦国、博多もその例外ではなかつた。天正十五年三月、秀吉は島津氏の軍勢を九州に返すべく、博多に陣を進めた。この時有力な商人が秀吉

よく擦れてどれもが芸術作品のように見える。ここで高さ・直径とも約三センチの円柱状の流木を持つて帰ることにした。まだ先があるのを石を乗せて所有を示す占め石をしておいた。吹上浜の目的は一九八一年に、江戸初期の古伊万里の赤絵の皿・鉢・碗片が大量に漂着し、金の峰町高橋海岸の潮狩で発見されているので、そのところを確認することで、岡垣町の添田氏と一緒に行つたのである。次第に日が傾きはじめ、小雨が降つてきた。漂着物が少し切れたところで、戻ることになった。置いていた流木を抱え、休め休めしながら車を停めていたところまで運んだ。翌八日は六時三十分起床、七時に朝食、七時三十分には宿を出発。万之瀬川の河口北側から、昨日歩き残した所まで歩いた。あまり漂着物はなかつたが、この軽石は、三四センチ厚さの0.5センチ平たく円状になつており長年月波に洗

那から宗馬半島にまで御朱印船を送つたのである。この海洋貿易の気運は、その後多くの貿易を生んだ。造船技術も多勢博多に集り、運航技術も向上していった。この時代背景の中にあつて、海外から殊に博多の商標を刺戟したのは、明朝の滅亡、清朝の建国による世に謂う国性策動である。明の遣使船が義兵を起し、正保二年幕府が援軍を出した。将軍は外様光国内事情から多くは外様浪人を整理するため援助派兵を考へ、水戸光圀もそれに賛成したが、幕府は財政の点から同調せず消滅政策

を固執したのである。その後多量の成功も万治元年に援助を出したが、遂に派兵は実現しなかつた。注目すべきは、この際幕府に替つて薩ながら助勢したのが博多をはじめ平戸長崎の豪商連である。資金を提供して、所謂民間交渉に熱意を示した。成功の母は平戸の人で、彼自身は長崎平戸で長生したので、この地方に友人知己が多かつた一人で、武器を積んだ大船が対馬で捜査されて伊藤一族が悲惨極まる刑へとなつたが、伊藤神宮の神玉として神宮御館に取藏されているのは金銅製雛形高機である。我々が国でもいつの時代から、地機や高機を使用する

が、機種と用途を若干異なるが、現代まで各地で同時に使用されてきた一方は足引き機である。伊勢神宮では春秋の二度、神御衣祭に織られたばかりの真新しい和紗(にきたえ一絹)と荒紗(あらたえ一麻)とが神前に供え取られている。これは、各地の民俗資料館に取藏されている民具の民俗資料をみるにわかる。考古資料の中から縫機技法の圧痕や原始機使用の布の圧痕がついた土器片が採取されている。これは、半島から中国大陸から地機・高機が渡つてきたかは定かではないが、ハニワや他の出土品からみても、弥生後期か古墳時代に渡つてきたとも思われる。世界から、古代より注目されて使われていた東西を結ぶ道が、「絹の道」という名のごとく、古代から中国・朝鮮は織り物でも我國の師の国であつた。しかし、型を残した奉獻品としては、織機が供えられたのは、古代祭祀が整えられ、祭祀品に金銅製雛形品が加えられてきた奈良・平安の時代と考えられる。(松)



胸は、肋骨・下頸骨等を取り出した。完全なものはなかったが状態を知ることができ。この骨のイルカ長いカからハセイルカではないかと思う。頭骨・下頸骨の部分に一部脂肪と腐敗した肉が付着していたので、冷たかつたが海に入り洗つたので、それをビニール袋に入れて砂丘の間に隠し先を進む。薬瓶の「醫局院」はガラス製で陽刻された字が面白い。中国製ライター・ウケに重しにつけられた高さ一〇センチ、横二センチの土製錘等珍しく拾つてきた。車がないと多くの漂着物は拾つてくることはできないが、今回は添田氏の車で運んで行くことができたのである。それにしては砂丘から車まで運ぶのは大変で、手が抜けそだった。

故郷、神宮

(59)